Title	コンピュータとの共生
Author(s)	河島，茂生
Citation	ぱぴるす：聖学院大学図書館報 / 聖学院大学総合図書館，第 61 号, 2015
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5451
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ぱぴるす
聖学院大学総合図書館報
第61号（2015年秋）

特集：デジタル資料を活用する

コンピュータとの共生

河島　茂生

デジタル資料は驚異だ。インターネットにつながった端末さえあれば、ありとあらゆるものが調べられるような錯覚さえ抱かれる。グーグル・サーチだけで期待に応えてくれる結果が得られることも多い。それらに加え、いろいろなデータベースを活用すれば、情報検索の領域は大幅に広がる。調べものは楽になった。

しかし、ここで立ち止まって考えなければならない。未来はいかにあるのだろうか。性能が大幅に向上したコンピュータは、ビッグデータを処理し、そこから特徴量を自動的に析出することもできるようになった。スポーツの結果を伝える記事や決算報告のような定型的な文章もすでに作成できる。したがって、適当に検索をして、そこで出てきたものを切り貼りしてレポートに仕上げるだけの作業は、いずれコンピュータが自動的にすることになるだろう。そうした能力は人間には求められない。

私たちは、コンピュータが自動化しやすいレベルから抜け出さなければならない。そのために、なにをしなければならないか。創造性や想像性を培うことだ。その方法は一筋縄ではいかない。もちろん、基礎的な知識は覚えることも必要だろう。しかし、暗記に拘泥するべきではない。そのようなことはもっともコンピュータが得意とする。むしろ、デジタル資料にしろ、紙媒体の資料にしろ、時間をかけて個々の文献に向き合って意味を深く理解しようと努めることが重要ではないだろうか。そのときに、なにが書かれていないのか、その資料が書かれた背景はどのようなものであったかにも思いを巡らす。それが創造性や想像性につながる。

また、自分の言葉で表現し続けることが不可欠である。そして、他者に向けてその言葉を投げかけ、相手の言葉にも向き合ってほしい。というのも、自分の言葉で表現するには反省的に考えなければならず、他者の質問や反論によって思考が活性化するからだ。教育の場では、アクティブ・ラーニング型授業が積極的に導入されている。その学びのなかで、言語能力を養い自分の頭で考える訓練を積んでほしい。そこでチームワークもできるようになる。リーダーシップが鍛えられる場面にも出くわすだろう。新しいものを生み出すには他者との協働が欠かせない。

コンピュータは支えてくれる。その意味で、コンピュータを使いこなさなければならない。しかし、コンピュータは、創造性などを自動的に与えてはくれない。自分で考え、言葉を鍛え、仲間と協働し、コンピュータにできない能力を身につける。それが未来におけるコンピュータと人間との共生のありかたではないだろうか。

（聖学院大学政治経済学部　准教授）

著書紹介

『デジタルの際
—情報と物質が交わる現在地点』

河島茂生編著

聖学院大学出版会　2014. 12

デジタル技術が現代社会に広く深く浸透している。そうしたなかで、我々はどこにいくのか。デジタル情報と関わりながらビジネスやアイデンティティ、映像、対面コミュニケーションといった領域がいかにあるかを考えた一冊。